

弘前大学
広報誌

ひろだい

vol.
23
2014.9

特集

期待が高まる、新たな食の研究拠点。
「弘前大学 食料科学研究所」

弘前大学食料科学研究所所長・教授 嗟峨 直恆
弘前大学食料科学研究所教授 中井 雄治

今年、設立10周年を迎え新たな一歩を踏み出した
「弘前大学出版会」

弘前大学出版会編集長 弘前大学人文学部教授 足達 薫

強力なサポートで就職活動を支えます！

「弘前大学学生就職支援センター」

弘前大学学生就職支援センター センター長

弘前大学教育学部教授

石川 善朗

[学内トピックス] 話題の広場から

米国ウッズホール海洋研究所

ケン・フェッセラー博士 特別講演会を開催 他



特集

期待が高まる、新たな食の研究拠点。 「弘前大学 食料科学研究所」

昨年春、青森市役所柳川庁舎内に設置された「弘前大学 食料科学研究所」が、この4月からいよいよ本格的に動き出しました。国が成長戦略として「攻めの農林水産業」を掲げ、日本有数の食料供給県として青森県への期待が高まる今、「食」の未来を拓く弘前大学の研究に熱い視線が注がれています。

新しい食の可能性を創造する 研究がスタート

弘前大学は、第二期中期目標の中で「環境・エネルギー・被ばく医療・食」の4テーマを教育・研究、及び社会貢献の柱に掲げています。それを受けて平成25年4月に青森市に開所した「弘前大学 食料科学研究所」は、「食」を研究テーマに食料科学に関わる研究を推進することで、国の成長戦略における攻めの農林水産業として農林水産物・食品の輸出額の拡大を見据えています。

研究所の使命はその可能性を調査・研究すること。具体的には「ゲノム情報科学」を活用した研究を通じて、青森県の農林水産物の高付加価値化・商品化を図ることによって、国の成長戦略に貢献しようと考えています。さらには、北東北地域と道南地域との連携強化を促し、「北日本におけるグローバル食の成長戦略」による地域振興のコーディネーターとして、世界に向けた北日本の「農林水産物普及の核」となる拠点を形成するべく活動していきます。

研究対象となる青森県は三方を海に囲まれ水産資源に恵まれた土地柄で、食料自給率が100%を上回る日本有数の食料供給県です。また、研究所が設置された青

森市は「食のまち」を宣言し、弘前大学とは特産品であるナマコやカシスの共同研究を行ってきた経緯があります。

研究所の基本方針である「高度で先進的な基礎研究による食料科学領域学術拠点の形成」「産学官金の連携による地域振興」「北日本農林水産物の成長戦略と国際化」のもと、現在は「農林水産物高付加価値化」と「水産資源の保全と活用」に関する研究を中心に4人の研究者を含む6人の所員で運営。数年後にはさらに「食と健康」「先導的食料生産技術」の研究もスタートさせる計画です。

最新の遺伝子科学が導きだす ブランド戦略

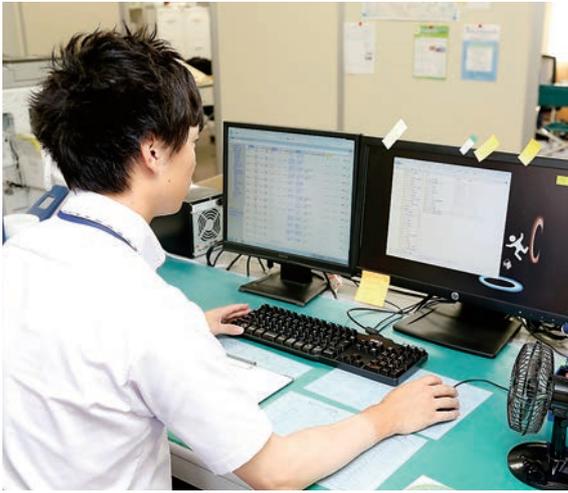
今後、研究所が目指していくのは「県産農林水産物の高機能ブランド化」とそれに伴う「地域活性化戦略の策定」です。たとえば、特産品であるリンゴから体に良い成分を新たに見つけることができれば、高く販売することも可能になります。また、この成分を抽出して健康食品を作ったり、医薬品の開発にもつながるかもしれません。そこで今回注目されているのが、生物を生物たらしめている全ての遺伝情報であるゲノムを活用した「オミクス食料科学」による研究です。生物の体に取り込まれた物質によっ

て、細胞内では遺伝子をもとにさまざまな酵素による化学反応や代謝経路の変化が起こります。それら種々の分子情報を網羅的に解析して、食品の持つ機能性・形質改良など食と健康に関わる領域を探求しようとする学問分野が「オミクス食料科学」です。中井教授のグループによって進められている「農林水産物高付加価値化研究」では、こうした遺伝子情報の変化をもとに、体に良い成分を探しだそうとしています。

実験過程においては、通常なら実験動物のマウスにいろいろな餌を食べさせ、どうい



2013年春に青森市役所柳川庁舎内に設置された「弘前大学 食料科学研究所」



研究者たちを支える事務職員の仕事も多忙を極める



夏と冬の状態に温度管理された人工海水にはイワノリが培養されている



1cm四方の基盤上に2万数千ものDNA断片が整列するDNAマイクロアレイ



採取したサンプルから機能性成分を分離・分析するための超高速液体クロマトグラフィ装置



研究所の様子。地道な分析作業を重ねて有望な食品成分を見つけ出す



弘前大学 食料科学研究所 所長・教授
嵯峨 直恆(さが なおつね)

1973年、山形大学理学部生物学科卒業。1977年、北海道大学大学院理学研究科植物学専攻修士課程修了。1981年、同専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会奨励研究員、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校海洋科学研究所研究員、米国ノースイスタン大学生物学部研究員を経て1985年、水産庁北海道区水産研究所主任研究官・研究室長。1990年、東海大学海洋学部教授。1997年、同大学海洋研究所先端技術センター教授・センター長。2001年、北海道大学大学院水産科学研究科教授。2005年、同大学院水産科学研究院教授。2010年、同研究院長・大学院長・学部長併任。2014年から現職。理学博士。

うふうに体が変わったのかデータを取ることから始めますが、スペースもマンパワーも限られていることから、人と共通する基本的な遺伝子セットを有するショウジョウバエを使う実験の準備を進めています。中井教授は「新設の研究所らしく新しい試みにも挑戦したいと思っています。生物学的にショウジョウバエである程度のことは見られると予測できますし、少ないスペースで済むのももちろん、成虫になるまでの期間が短いので、短期間で多くの実験ができる」と期待しています」と意欲を見せます。

大胆な連携で トータルブランド化を目指す

一方、水産の専門家として「水産資源の保全と活用に関する研究」を進めるのは、食料科学研究所の所長を務める嵯峨教授のグループです。太平洋・津軽海峡・日本海・陸奥湾に及ぶ青森県沿岸各地に生息する多様な魚介類や藻類を対象に、聞き取りや地域の伝承などフィールドワーク的な調査からターゲットを絞り込み、実験から増養殖法を確立させることで種を取り卵をふ化させ、有望な海洋生物を見つけ出すための調査研究を行っています。

現在、研究所では嵯峨教授が開発に携わったという人工海水を使ったイワノリ

の培養に取り組んでいます。人工海水のメリットはきれいなサンプルがたくさん取れること。いずれ種苗生産することになれば、多くの種を取らなければなりません。どの時期のどのような生殖細胞を利用したら良いのか、水温などを変えながら培養に適した生育条件の研究を進め、次の段階では中井教授のグループと連携しながら新しい高機能食品の可能性を探っていきます。「最近では温暖化で産地が北上しているため、海藻でも高温耐性の作物を作ろうという動きがあります。高温耐性のメカニズムを調べたり、徐々に高温に純化し生き残っている細胞を拾い出すなど、育種技術の開発も必要です」と嵯峨教授。

最後に両教授は「青森県は1次産業である農林水産業は非常に良い多様で質も高い。しかし県内で加工し商品化する力がまだまだ弱い」として、「6次産業によるトータルブランド化を目指し、青森全体のイメージアップにつなげたい。そのためには産学官の連携や異業種交流も大切。我々大学組織の連携を活用して大胆に取り組んでいきたい」と意気込みを語ります。

7月、食料科学研究所と深浦町の間で連携・協力に関する協定が締結されました。これによって水産資源における調査・研究がまた一歩前進します。



弘前大学 食料科学研究所 教授
中井 雄治(なかい ゆうじ)

1989年、東京大学農学部農芸化学科卒業。1991年、同大学院農学系研究科農芸化学専攻修士課程修了。同年、同専攻博士課程進学。1996年、同大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻博士課程修了。国立衛生試験所流動研究員・理化学研究所奨励研究員・同研究所研究協力員を経て2000年、金沢大学薬学部助手。2004年、同大学院自然科学研究科助手。2005年、東京大学大学院農学生命科学研究科アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニット特任助教授。2007年、同ユニット特任准教授。2009年、同研究科ILSI Japan寄付講座機能性食品ゲノミクス特任准教授。2014年から現職。農学博士。



弘前大学出版会設立10周年記念講演会

今年、設立10周年を迎え
新たな一步を踏み出した

「弘前大学出版会」

7月4日、弘前大学創立50周年記念会館において「弘前大学出版会 設立10周年記念講演会・祝賀会」が晴れやかに挙行されました。これを機に「弘前大学出版会」の設立経緯を振り返りながら、これまで150冊を超える書籍を世に送り出してきた「弘前大学出版会」の仕事、そして、その果たすべき使命に迫ります。

模倣でなく弘前大学らしさを 掲げた出版会

多くの国立大学や大規模な私立大学が有し、学内研究者の出版を予算的にも業務的にも積極的に支援することを目的として設立される「出版会」。しかし、長い間その事業的な性格から学内には設立できず、学外に会社組織や独立採算による組織としての形態を取るしかありませんでした。契機となったのは平成16年の国立大学の法人化。平成14年から出版会の設立準備を進めてきた弘前大学では、あくまでも収益事業とはせず大学組織内に部局として置くことで「教育研究活動の補助活動」として位置づけることを決め、「弘前大学出版会」は法人化の年の6月に設立を果たしました。今日まで出版会の経費は学部や研究科と

同じように学内予算に計上され、それによって出版活動が行なわれています。このように出版会が大学内に置かれたのは、国立大学法人では弘前大学が最初のケースとなり、以後、平成19年には「大学出版部協会」への入会が認められ、平成21年からは「学内共同教育研究施設」となっています。

今年、出版会の4代目編集長に就任した足達教授は「こういった経緯は出版会の位置づけとして非常に重要なこと」として、「利益を目的とするのではなく、大学のさまざまな教育活動を出版というものを通じて広めていく。またその拠点として地域に根ざし、あるいは世界中と結びついて広がっていく存在として出版会を積極的に位置づけたという意味でも、ほかとは違う大きな特色」と強調します。大学の研究者たちが心血を注いだレポートなどは、装丁やレイアウトなどの体裁が整えられ、本の身分証明書とも言



弘前大学出版会 百冊出版記念誌「弘前大学 知の散歩道」

える国際標準図書番号「ISBNコード」を付された書籍として世に送り出せる。地方のハンディを乗り越え多くのチャンスが与えられることを願っての出版会設立でもありました。

先達諸氏が支えた 出版会の仕事を振り返る

出版会がこれまで学内外の著者にかかわらず、さまざまなジャンルの書籍を出していることをご存知でしょうか。出版会の使命でもある教員や学生による専門性の高い「学術論文・研究書」をはじめ、分野別のシリーズものである「出版会叢書」、学生の教科書として使われることが多い「テキスト類」、研究会などによる機関誌や会報といった「定期刊行物」、出版会が適当と認めた「一般書」など、年間10冊から多い時では



弘前大学の教員や学生が執筆する「弘大ブックレット」シリーズ



調査・研究に基づく白神自然観察園のガイドブック



企画本などは装丁も趣向が凝らされる



研究所を有する弘前大学ならではの白神をめぐる研究書



20冊ほどが出版されています。足達編集長によれば、「意外に思われるかも知れませんが一番多いのが一般書。利益を求めめる出版社のように売するための仕掛けをすることなく、著者の皆さんに“本当に読んで欲しいものを世に出す機会”を提供できていると思う。もちろん出版するかどうかは、各編集員がさまざまな視点から議論を重ね判断します。そのようにして出版会の理念に合致したものを厳選し、積極的に出版しています」と「弘前大学出版会」としてのラインを強調します。

出版会は現在、運営委員会委員長を兼務する編集長をはじめ、各部局・研究科の編集員9名・運営委員11名からなり、定期的に編集・運営会議が開かれています。足達編集長は「私たちがこうして活動できるのは、歴代編集長が積み重ねてきた功績はもちろん、屋台骨をしっかりと支え煩雑な仕事に日々携わる事務スタッフの力なくしてはなりません。編集員にしても人が人を集

める理想的な形で活動が続いてきました。出版会はこのに関わる多くの方々のボランティア的な活動によって成り立っています」と感謝を示します。

10周年に思うこと、そして目指すこと

今年6月28日、設立10周年を迎えた日に、記念書籍として通算154冊目となる『弘前大学で見つけた一〇七の言の葉ノート 勉学 人生 世界観』が刊行されました。弘前大学の教職員107名の座右の銘や心に残る言葉から、それにまつわる思いなどを綴ってもらったエッセイ集で、多くの方々、特に若い世代へのメッセージが込められた一冊は、出版会が企画の立ち上げから編集・出版を行ったものです。足達編集長は「こういった自主企画本に寄せられる期待は大きい」と話します。出版会の記念すべき第1冊目『津軽の華 弘前大学所蔵ねぶた絵全作品』はもちろん、津軽地域の社会や文化を紹介する「津軽はおもしろいシリーズ」や、弘前大学から発信される「弘大ブックレット」なども、地域貢献的な意味合いを持つ自主企画本。平成24年に100冊記念として出版され、多くの人々の言葉で弘前大学の魅力を多面的に紹介した『弘前大学 知の散歩道』もまた然り。また、平成22年に創設された「弘前大学出版会賞」は、企画や執筆の励みになればと創設されたものです。

足達編集長は「こういったものを軸とし

て自主企画をどう進めていくかが次の10年の課題となるでしょう。私がやるべきことは歴代編集長が進めてきたことを継続していくこと、そして、出版会の活動を知ってもらえるよう一層努めることです。そのためには大学組織としての質を保ちながら、地域の方たちに親しまれる存在にならなければならないと思っています。出版会は著者の夢や思いを広げるお手伝いをさせていただくところ。本が人と人を繋げその輪がどんどん広がっていくための、結び目のような存在になれたら」と力を込めます。



弘前大学 出版会 編集長
弘前大学 人文学部教授
足達 薫 (あだち かおる)

1992年、東北大学文学部卒業。1994年、同大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。1995年～1998年、イタリア、ローマ第一大学美術史学科聴講生。1999年、東北大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得退学。同年、同大学文学部助手。2000年、弘前大学人文学部専任講師。2003年、同学部助教授。2007年、同大学准教授。2012年、同大学教授。2014年、弘前大学出版会 編集長に就任。研究の専門はイタリア・ルネサンス美術史。



弘前大学出版会 設立10周年記念書籍『弘前大学で見つけた一〇七の言の葉ノート』

米国ウッズホール海洋研究所 ケン・フェッセラー博士 特別講演会を開催

本学では、3月18日(火)、日本学術振興会短期S研究者(ノーベル賞級の国際的な賞の受賞者など、特段に優れた業績をもち、当該分野で現在も指導的立場にある外国人研究者)として来日中の米国ウッズホール海洋研究所海洋環境放射能センター長



佐藤学長との懇談の様子

ケン・フェッセラー博士を講師に迎え、本学医学部コミュニケーションセンターにて特別講演会を開催しました。

「福島第一発電所事故により放出された放射性物質の海洋への影響」をテーマとした英語での特別講演会には、学生・教職員、一般市民等あわせて約50名が参加しました。講演の中でフェッセラー博士は、福島原発事故直後から行っている日本との国際共同研究チームによる福島沖での



特別講演会でのケン・フェッセラー博士

海洋調査について、放射性セシウムは河川と原子力発電所の放射性物質の漏洩により供給されているので沿岸の堆積物は数十年汚染されたままとなるかもしれないこと、海流によって運ばれる放射性セシウムは今年中にアメリカの西海岸沖で検出されることが予想されるが健康リスクは低いと考えられること、今後、海洋における放射性セシウムおよび放出された放射性核種の動態に関する更なる研究と適切なモニタリングが多くの問題を明らかにする手助けとなると語りました。

また、翌19日には夫人とともに佐藤学長を訪問し、初代被ばく医療総合研究所長であった佐藤学長に、自身の活動・研究内容と福島沖の現状等を紹介し、親交を深めました。

「ライフイノベーションアワード2013(AOMORI)」グランプリ(大賞)受賞

本学は、プロテオグリカン(PG)に関する研究及び事業化支援への取り組みについて評価され、青森県による「ライフイノベーションアワード2013(AOMORI)」の大賞及びプロダクト部門賞を受賞することとなり、3月19日(水)、青森国際ホテル(青森市)で行われた表彰式において、株式会社角弘とともに表彰されました。

「ライフイノベーションアワード2013(AOMORI)」は、青森県のライフ分野(医療・健康・福祉(介護))関連分野におけるイノベーションを促進させるため、同分野で新事業・新産業創出に貢献する等具体的な成果をあげているイノベティブ(革新的)かつクリエイティブ(独創的)、チャレンジ

ング(挑戦的)な取り組みについて、その主体である個人・組織等を対象に「次世代イノベーター人財」として表彰するため、平成25年度に青森県が新設しました。

表彰式当日は、本学からは代表として、「プロテオグリカン関連バイオマテリアルをコアとした津軽圏ヘルス&ビューティー産業クラスターの形成・拡大」事業の中根研究統括が登壇し、青森県の三村知事から、表彰状と記念品のトロフィーが授与されました。

表彰に続いて、各受賞者からのショートスピーチが行われ、中根研究統括からは、研究において、PG産業化におけるブレークスルーとなった大量精製技術の確立において、本学医学部の故・高垣啓一先生の貢献

が大きく、その業績を讃えるとともに、これからは高垣先生の遺志を胸に研究を行っていくことや、今までの研究成果から、PGに関して様々なことが解明されてきたことが報告されました。



青森県三村知事より表彰状を授与される中根研究統括

平成25年度弘前大学及び弘前大学大学院学位記授与式

本学では、3月20日(木)、9時から平成25年度弘前大学大学院学位記授与式を創立50周年記念会館において、来賓、関係者出席の下、厳かに行いました。

また、平成25年度弘前大学学位記授与式は同日11時から第1部(人文学部・教育学部)を、13時30分から第2部(医学部・理工学部・農学生命科学部)を、弘前市民会館において執り行いました。

はじめに佐藤学長から各学部の代表学生に学位記が授与されたの続き、学長告辞、

卒業生答辞が行われ、式典を終えました。

式典終了後は、記念写真に収まるグループや後輩達から胴上げの祝福を受けるグループなど、弘前市民会館前はしばらく祝福ムードでいっぱいとなりました。

学部、大学院合わせて1,584名が本学を巣立ちました。

また、教育学部附属学校園の卒業式は、小学校が3月16日(日)、中学校が3月8日(土)、特別支援学校が3月11日(火)、幼稚園が3月19日(水)に各学校園においてそ

れぞれ執り行われました。



卒業生による答辞の様子

学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム 平成25年度弘前市長と加盟大学長との懇談会開催

弘前市内の6大学が加盟している学園都市ひろさき高等教育機関コンソーシアム(事務局:弘前大学)では、3月24日(月)に「平成25年度弘前市長と加盟大学長との懇談会」を弘前大学創立50周年記念会館2階の岩木ホールで開催しました。

この懇談会は、本コンソーシアムの地域における役割や実施事業の方向性などを協議する場として毎年開催されているもので、今回は「弘前市とコンソーシアムの連携強化に向けて」をテーマに、弘前市長と弘前市内6大学の学長等が活発な意見交換を行いました。

その中では、コンソーシアム側を代表して同会長でもある佐藤学長から、今後も弘前市の発展に寄与する事業等の推進を図っていく方針が示されました。また、葛西弘前市長からは、今年度実施された「コンソーシアム共通授業」での自ら講師を務めた感想も交え、弘前市は本コンソーシアムの活動への最大限の協力をする旨の意向が述べられました。

本コンソーシアムでは、来年度以降も弘前市の協力を得ながら、各機関の交流を深めるとともに地域課題解決にも関連する各種事業等を実施予定としています。



懇談会の様子

北日本新エネルギー研究所とむつ市との間で連携・協力に関する協定を締結

本学北日本新エネルギー研究所は、むつ市との間で、相互の発展に資するため両者が包括的な連携のもと再生可能エネルギーの資源調査、資源開発、再生可能エネルギー産業の分野において相互に連携・協力する協定を2014年3月27日に締結しました。

むつ市内で行われた協定書調印式には、むつ市から宮下前市長、新谷副市長及び遠島教育長が、本学から佐藤学長、大河原社会連携担当理事・副学長、村岡北日本新エネルギー研究所長が出席して行われ、宮下前むつ市長と村岡北日本新エネルギー研究所長が協定を締結し、また、先行して進める予定の地熱調査に関する覚書を取り交わしました。

調印にあたって、宮下前むつ市長からは、「むつ市が有するポテンシャルを生かした再生可能エネルギーの資源開発が地域振興につながることを期待しており、先行して地熱開発を協力して進めていきたい。」と、村岡北日本新エネルギー研究所長からは、「今後協力して再生可能エネルギーの開発・促進を進めていくが、まず燧岳の地熱資源調査に協力することで地域の産業育成に貢献したい。」とそれぞれ挨拶がありました。また、佐藤学長からも「本協定の締結は、これまで以上にむつ市及び下北地域との連携協力関係の強化に繋がるものと考えており、大変感謝している。」と挨拶がありました。

これまで、むつ市及び下北地域とは様々な協力関係を進めてきたが、再生エネルギー開発に関する協力を加え、更なる連携を図っていくことが期待されます。



関係者による記念撮影の様子

平成26年度弘前大学及び弘前大学大学院入学式

4月8日(火)、弘前市民会館において平成26年度弘前大学入学式が各学部の新入生らを迎え、厳かに行われました。

入学式は、第1部(人文学部・教育学部)が11時から、第2部(医学部・理工学部・農学生命科学部)が13時30分からの二部制で举行されました。

式典では御来賓、役員及び部局長の紹介、入学許可、佐藤学長の入学式告辞、最後に新入生代表による学生宣誓があり、晴れの式典が終了しました。

また、弘前大学大学院入学式は、同日9時から弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにお

いて举行され、教育学部附属学校園の入学式・入園式は、小学校が4月5日(土)、中学校及び特別支援学校が4月7日(月)、幼稚

園が4月10日(木)に各校園においてそれぞれ執り行われました。



新入生代表による学生宣誓の様子



入学式会場前での新入生歓迎の様子

トルクメニスタン大使による特別講演会を開催

本学では、4月10日(木)、駐日トルクメニスタン大使のグルバンマメット・エリヤゾフ氏による特別講演会を、弘前大学創立50周年記念会館において開催しました。

エリヤゾフ大使は、佐藤学長を表敬訪問、懇談されたほか、教職員を対象とした「科学技術協力への期待～トルクメニスタン国の紹介～」と題した特別講演を行いました。

トルクメニスタンは、中央アジアに位置し、面積は日本の約1.3倍の48万8,000平方キロメートル、天然資源と農産物に恵まれた国です。講演会では、天然ガス田埋蔵量が世界第4位を誇ることや、同国の歴史、産業として手織り絨毯が盛んに生産されていることなどが紹介され、医学用植物、天然資源の活用に関心が高

く、今後、科学技術をはじめ、多分野で本学と連携していきたい意向が示されました。会場は満席となり、参加した約70名の教職員及び学生は、普段直接聞くことが出来ない海外の話に熱心に耳を傾けていました。



講演するグルバンマメット・エリヤゾフ大使

また、講演会終了後、トルクメニスタン大使一行が、北日本新エネルギー研究所(青森市)を訪問しました。研究所では、最新の研究設備や研究成果に触れ、大使から熱心に質問をされるなど、非常に有意義な訪問となりました。



北日本新エネルギー研究所視察の様子

COI特別講演会を開催

4月28日(月)、7月8日(火)及び8月4日(月)にCOI特別講演会を実施しました。これは、本学が平成25年度に文部科学省の「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」^{*}に採択され、本学と企業及び自治体等で組織する「脳科学研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発(略称:革新的「健やか力」創造拠点)」をテーマとした研究拠点の活動を推進するに

あたり、他拠点の取り組みを学び、COI拠点間の連携や更なる知見を深めることを目的として開催しております。

本講演会は一般市民の方も対象としており、どなたにでも興味を持っていただける内容です。今後もこのような講演会を継続的に開催すると共に、本拠点と全国のCOI拠点との連携を強化しながら、COI事業を展開していきます。

^{*}「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」…現在潜在している将来社会のニーズから導き出されるあるべき社会の姿、暮らしのあり方(以下、「ビジョン」という。)を設定し、このビジョンを基に10年後を見通した革新的な研究開発課題を特定した上で、既存分野・組織の壁を取り払い、基礎研究段階から実用化を目指した産学連携による研究開発を支援するプログラム。平成25年度は全国12拠点が採択。

[第1回特別講演会]

日時：4月28日(月) 14:00～15:30

講師：名古屋大学総長補佐／医学部附属病院先端医療・臨床研究支援センター教授／COI構造化チーム委員

水野 正明氏

演題：健康寿命を延ばすための健康づくり・街づくり～名古屋大学における取り組みを中心に～

[第2回特別講演会]

日時：7月8日(火) 15:00～16:30

講師：京都大学大学院医学研究科附属ゲノム医学センター長

松田 文彦氏

演題：京都大学のCOI戦略～ながはまコホートと地域に根ざした未来型健康づくりの試み～

[第3回特別講演会]

日時：8月4日(月) 13:30～15:00

講師：東北大学COI STREAM機構長(プロジェクトリーダー)／株式会社東芝ライフサイエンス 部長

高山 卓三氏

演題：さりげないセンシングと日常人間ドックで実現する理想自己と家族の絆が導くモチベーション向上社会創生拠点



名古屋大学 水野正明氏



京都大学 松田文彦氏

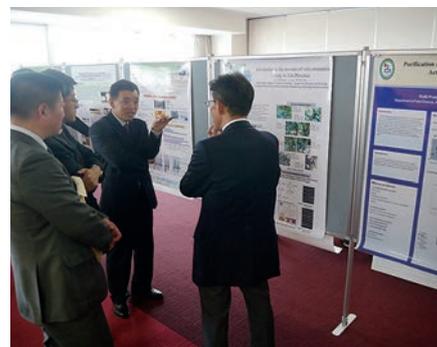


東北大学 高山卓三氏

延辺大学農学院との合同学術シンポジウムを開催

農学生命科学部は、5月7日（水）、創立60周年記念会館「コラボ弘大」において、「弘前大学農学生命科学部と延辺大学農学院との合同学術シンポジウム」を開催しました。本学では、2000年に中国東北部に位置する延辺大学と交流協定を締結し、共同研究や学生交流を進めてきております。両大学は、ほぼ同緯度に位置し気候条件が近くリンゴなどの果樹栽培が盛んなこと、大学から程近い場所に世界自然遺産があり研究フィールドとしていることなどの共通点が多く、近年では延辺大学から本学の大学院に進学する留学生も増加し、研究交流がますます活発化しています。

当日は、午前の部として、留学生を含む大学院生、両大学教員がポスター発表を行い、日本語、英語、中国語を交えての質疑応答となりました。午後の部では基調講演を行い、延辺大学農学院 朴一龍教授が「延辺の果樹産業について」と題して日本語で、本学の農学生命科学部 前田智雄准教授が「弘前大学における野菜の研究」、同橋本勝教授が「津軽地域の生物資源を用いた機能物質の探索」と題して英語で講演を行いました。今回の合同シンポジウムの開催は、両大学が有する地域資源の研究成果や活用についての相互理解を深めることに、そして、両大学間の連携強化に繋がりました。



ポスター発表について活発に意見交換を行う両大学の研究者

特定プロジェクト教育研究センター「北日本考古学研究センター」「地域未来創生センター」の看板を上掲

6月10日（火）、今井人文学部長、関根北日本考古学研究センター長により「北日本考古学研究センター」の看板が上掲されました。北日本考古学研究センターは、亀ヶ岡文化研究センターの機能を発展・強化させる目的で、2014年4月に弘前大学特定プロジェクト教育研究センターとして人文学部に新設されました。同センターは、文化財科学を中心に、古環境学、地球科学、農学の多領域にまたがる文理融合的な研究機能を拡大し、今後、北日本の考古学研究の中心的役割を果たすことを目指します。

同日、今井人文学部長、李地域未来創生センター長により「地域未来創生センター」の看板が上掲されました。地域未来創生センターは、雇用政策研究センターの活動を母体として2014年4月に弘前大学特定プロ

ジェクト教育研究センターとして人文学部に新設されました。同センターは、文化資源の開拓と地域文化の活用、地域づくり総合研

究、震災復興・災害研究等、幅広い領域をカバーする研究組織として、今後、地域が抱える課題解決の方策を探っていきます。



今井人文学部長(左)と関根センター長(右)による北日本考古学研究センター看板上掲



今井人文学部長(左)と李センター長(右)による地域未来創生センター看板上掲

男女共同参画推進室「平成26年度第1回さんかくカフェ」を開催

男女共同参画推進室では、「学長と語り合う～男女ともに働きやすい・学びやすい弘前大学～」をテーマとした平成26年度第1回「さんかくカフェ」を、6月11日（水）に弘前大学創立50周年記念会館2階岩木ホールで開催しました。

この「さんかくカフェ」には、佐藤学長、大河原社会連携担当理事をはじめ、教職員・学生ら計26名が集まり、男女共同参画の現状や悩みを車座で語り合いました。参加者からは、子育て中の職員を職場で支援することにジレンマを感じるなどの意見や、

職員の子育てと仕事の両立を「職場で」支援するだけでなくその「職場それ自体を」いかに支援するのかについて、活発な意見交換が行われました。

佐藤学長からは、「男女共同参画が当たり前の社会」を目指す必要性とともに、周囲の支援環境を気軽に活用できる職場づくりの重要性が述べられました。

参加者は、本学の男女共同参画に関する課題を共有すると同時に、解決策について皆で知恵を出しあう楽しさや、可能性を感じたひと時となりました。



さんかくカフェの様子

文部科学省山中事務次官が弘前大学を訪問

文部科学省 山中事務次官が、6月19日(木)に本学を訪問し、佐藤学長ら役員等と、本学におけるガバナンス改革、教育研究及び地域貢献等、様々な取組状況について意見交換を行いました。その中で、山中次官は、「ガバナンス改革について、学長がリーダーシップを発揮し、主体的に実施している。今後、弘前大学が、魅力ある地域づくりの拠点となる大学となり、多くの若者がこの地に来て、そして多くの若者がこの地に残ってくれるような地域づくりに貢献してほしい」と期待を寄せました。

また、資料館では、担当者から各展示品について説明を受け、本学の前身である官立弘前高等学校出身の太宰治が在学中に使用したノート(原本)等を見学しました。

その後、革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)「脳科学研究とビッ

グデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発」の取組や附属病院の運営状況について、中路医学研究科長、藤病院長からの説明を熱心に聴

いた後、被ばく医療に対応した高度救命救急センター、ヘリポート、手術支援ロボット(ダヴィンチ)等を視察しました。



資料館で太宰治のノートを見学する様子



高度救命救急センターで被ばく医療機器を視察する様子

インドネシア・セミナー講演会を開催

本学では、6月24日(火)、国際連携本部主催によるインドネシア・セミナーを、弘前大学創立50周年記念会館において開催しました。このセミナーは、本学の国際交流事業の一環として、インドネシア大使館文化担当官のイクバル・ジャワド氏を講師としてお招きし、本学学生や教職員を対象とした講演を行ったものです。

ジャワド氏は、佐藤学長を表敬訪問後、教職員を対象とした「Strategy for Human Development of Indonesia in the Future: Case of Higher Education」(これからのインドネシアにおける人材育成戦略:

高等教育について)」と題した特別講演を行い、インドネシアの高等教育機関数や学生数などの現状を紹介しました。

また、スマトラ島やカリマンタン島に新しい大学をつくり、充実した教育環境づくりを進めていることなど、今後の方針を語り、参加した約70名の教職員及び学生は、普段直接聞くことが出来ない海外の話に熱心に耳を傾けていました。

また、講演会終了後、インドネシアからの留学生も参加した交流会が開催され、活発な質問と意見交換が行われました。



イクバル・ジャワド氏による講演の様子

弘前大学出版会設立10周年記念講演会・祝賀会を開催

弘前大学出版会では7月4日(金)、「弘前大学出版会設立10周年記念講演会・祝賀会」を創立50周年記念会館1階「みちのくホール」で開催しました。

講演会では佐藤学長の挨拶後、足達編集長から出版会10年の歩みや記念書籍「弘前大学で見つけた一〇七の言の葉ノート」の紹介が行われました。

続いて記念講演として、亀山 郁夫名古屋外国語大学学長が「還暦の太宰」と題し、養老 孟司東京大学名誉教授が「本の未来」と題し、それぞれ講演を行いました。著名な講

師2人の講演会ということで、会場には学生・教職員だけでなく、多くの一般市民を含む300名を超える来場者があり、立ち見も困難となるほどの大盛況となりました。

引き続き、2階「岩木ホール」に場所を移して祝賀会が行われました。これまでの出版会刊行物の執筆者や創設当時を知る教職員等約60人が集まり、設立10周年を祝いました。



講演する亀山氏



講演する養老氏

第一回市民ボランティア講座「災害ボランティア-KOBEから東日本へ、そして」開催

弘前大学ボランティアセンターは、7月4日（金）、弘前市との共催で、第一回市民ボランティア講座「災害ボランティア-KOBEから東日本へ、そして」を、創立60周年記念会館コラボ弘大8階 八甲田ホールで開催しました。

当センターでは、東日本大震災発生直後から、市民、教職員、学生が一体となり「チーム・オール弘前」として継続して岩手県野田村でボランティア活動を行っています。市民ボランティア講座を開催し、より多くの市民や学生にボランティア活動の実状と重要性を幅広く理解してもらうことで、ボランティア活動へ積極的に参加していただくことを目指しています。

当日は市民や学生ら31名が参加し、李永

俊副センター長より開催の挨拶の後、大阪大学大学院人間科学研究科渥美公秀教授から「災害ボランティア-KOBEから東日本へ、そして」と題した講演が行われました。

これまで渥美教授は、東日本大震災発生後から、岩手県野田村の被災地でボランティア活動を継続的に行っており、李永俊副センター長とともに多くのボランティア活動に携わってこられました。

講演では、被災地・被災者へのボランティアには、効率性よりも被災者の生活を優先することの重要性や、被災者とのコミュニケーションの仕方、ボランティア活動を続けることの大切さ、生活に埋め込まれた防災、目に見えない防災活動に焦点をあてることなど、渥美教授がこれまで災害ボランティア活動を通

して得てきた知見を基に様々な情報が提供されました。

さらに講演後は、今後のボランティア活動について、本学がどのようなアプローチをしていけばよいかなど意見交換が行われました。



渥美大阪大学教授による講演の様子

「課題解決型学習と主体的な学び ―大学生のチャレンジ2014中間報告会―」を開催

7月18日（金）に弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大において、「地域企業と実践する課題解決型学習による主体的な学び」をテーマに、地域企業から提示された課題に対して行ってきた今年度の活動の中間報告を行いました。

弘前大学は文部科学省GP「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」の採択を受け、地域企業の抱える経営課題を素材に学生独自のアイデアで企画・提案を行う活動を通し、社会人基礎力を高めることを目的とした課題解決型学習を実施しています。

今回の報告会では、提示された課題に対

しての企画提案や提案に至るプロセス等の報告に対し、外部評価委員の方々からさまざまなご意見・評価をいただきました。今回いただきました貴重なご意見ならびに評価を



課題解決型学習の中間報告を発表する学生たち

今後の活動に活かし、課題に対する最終企画提案に向けて活動を行っていく予定です。

連携企業先

- ①あおもり観光デザイン会議
- ②企業組合でる・そーれ
- ③株式会社木村食品工業
- ④The企画エルサーチ株式会社
- ⑤たびすけ 合同会社西谷
- ⑥有限会社二唐刃物鍛造所
- ⑦株式会社原田種苗
- ⑧株式会社ラビブレ
(順不同)

食料科学研究所と深浦町との間で連携・協力に関する協定を締結

食料科学研究所は、深浦町との間で、相互の発展に資するため両者が包括的な連携のもと、農林水産物に関わる高機能ブランド化、地域資源調査、地域資源研究開発及び新産業創出等の分野において相互に連携・協力する協定を2014年7月22日に締結しました。

深浦町役場で行われた協定書調印式には、深浦町から吉田町長、菊池副町長、坂本教育長が、本学から大河原社会連携担当理事・副学長、羽田副理事、嵯峨食料科学研究所長が出席し、吉田町長と嵯峨食料科学研究所長が協定を締結しました。

調印にあたって、吉田町長からは、「少子

高齢化・過疎化に伴う人口減少の対応策として、本協定の締結により産学官連携を強めて、地域振興を加速させたい。」と、嵯峨食料科学研究所長からは、「自然豊かな深浦町で、①マグロのブランド力推進、②サーモン養殖の可能性調査、③モズク・エゴノリ等の未・低利用海藻の高機能ブランド化の3つのプロジェクトを進めたい。」とそれぞれ挨拶がありました。また、大河原社会連携担当理事・副学長からも「深浦町は、教育、研究、地域活性化の点で大変魅力的な地域であり、本協定の締結に感謝している。」と挨拶がありました。

これまでも、深浦町とは様々な協力関係

を進めてきましたが、食や地域貢献に関する協力を加え、更なる連携を図っていくことが期待されます。



協定書締結の様子

弘前大学教育に関する表彰

本学では、前年度において優秀な成績を修めた学生及び教育に関して優れた業績を上げた教員を対象として、8月5日(火)に事務局大会議室で表彰式を実施しました。

今回の受賞者は、各学部等から推薦された学生26名、教員7名で、表彰式には、伊藤理事(教育担当)及び各学部長・研究科長並びに医学部附属病院長も出席し、佐藤学長から一人ひとりに表彰状と副賞が贈呈されました。

これを受けて、学生を代表して農学生命科学部2年の本多里奈さんから、教員を代表して医学研究科の大山力教授から謝辞が述べられ、表彰式は和やかなうちに終了しました。

平成26年度 弘前大学成績優秀学生被表彰者一覧

【学部学生】

人文学部 現代社会課程	2年 松野 奏子
人文学部 経済経営課程	3年 谷尾 詩織
人文学部 人間文化課程	4年 神 冴香
教育学部 学校教育教員養成課程	2年 中村 智咲
教育学部 学校教育教員養成課程	3年 岸本 麻依
教育学部 養護教諭養成課程	4年 太田 祥加
医学部 医学科	2年 石山 真美
医学部 医学科	3年 岩井 美穂
医学部 医学科	4年 奥瀬 諒
医学部 医学科	5年 久保田 実怜
医学部 医学科	6年 小田 敦子
医学部 保健学科 看護学専攻	2年 新山 優奈
医学部 保健学科 放射線技術科学専攻	3年 村上 緩菜
医学部 保健学科 検査技術科学専攻	4年 下天摩 惟
理工学部 知能機械工学科	2年 遠藤 善生
理工学部 数理科学科	3年 松坂 公暉

理工学部 地球環境学科	4年 堀内 大輝
農学生命科学部 生物資源学科	2年 鈴木 里彩
農学生命科学部 生物学科	3年 本多 里奈
農学生命科学部 生物学科	4年 工藤 莉奈

【大学院学生】

人文社会科学研究科 文化科学専攻	2年 安田 創
教育学研究科 教科教育専攻	2年 浅田 鶴予
医学研究科 医科学専攻	2年 工藤 直美
保健学研究科 保健学専攻	2年 西山 彩香
理工学研究科 理工学専攻	2年 井関 洸太
農学生命科学研究科 農学生命科学専攻	2年 菅野 翔伍

平成26年度 弘前大学における教育に関して優れた業績を上げた教員の被表彰者一覧

【学部長・研究科長推薦】

人文学部	李 永俊教授
教育学部	面澤 和子教授
医学研究科	大山 力教授
保健学研究科	千葉 満講師
理工学研究科	黒川 敦准教授
農学生命科学部	工藤 明教授

【学内共同教育研究施設長・医学部附属病院長等推薦】

医学部附属病院	伊藤 勝博講師
---------	---------



弘前大学表彰

本学では、教育研究活動、課外活動の振興、医療活動、教育研究支援活動、大学改革の推進、社会活動、職員の模範となるような活動等において顕著な功績があった本学職員・団体及び本学との産学連携、社会連携又は教育若しくは文化活動において顕著な功績があった学外の方を「弘前大学表彰」により表彰しています。

今回は、顕著な功績があると認められた8名の本学職員及び3つの学内の団体が「弘前大学表彰」により表彰されることとなり、6月2日(月)午前10時から事務局大会議室において表彰式が執り行われ、佐藤学長から表彰者に対し表彰状及び記念品が授与されました。

表彰者は次のとおりです。

【学内・個人】

関根 達人氏

平成20年4月から人文学部亀ヶ岡文化研究センター長として、北東北北海道域に分布する縄文遺跡群の調査研究保存伝承等の事業や専門研究等とおして、当該分野において多大な学術的貢献を果たしたことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

上野 伸哉氏

てんかんの病態解明と治療法の開発の分野において、モデル動物を用いて発症機構を解明し、発症以前に細胞レベルの異常を補正することにより発作・発症を抑制することを発見し、てんかん予防戦略の新たな展開に寄与したことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

伊藤 悦朗氏

急性巨核芽球性白血病の新規原因遺伝子を発見し、本症の発生メカニズムの全容解明に大きく寄与した上、この白血病の前段階から発症までの進行過程の確認は世界初であり、本症の診断治療に大きく貢献することが期待されることが、本学における教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

鷺坂 将伸氏

新規機能性分子集合体の開発と応用、そして分子設計の新しい概念の創出を行い、その研究業績により多くの競争的資金を獲得し、平成26年日本化学会コロイド及び界面化学部会科学奨励賞をはじめ多くの学会関連の賞を受賞したことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

鳥飼 宏之氏

女子高校生を対象に体験学習事業を実施し、独立行政法人科学技術振興機構サイエンスパートナーシッププログラムとして採択される等、理工学部における女子学生に対するキャリア形成支援活動に貢献してきたことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

原田 竹雄氏

リンゴのエチレン合成酵素に関わる遺伝子型を研究し、この対立遺伝子型の違いが果実成熟時のエチレン発生量を決定し、収穫前落果性の有無を規定していることを解明したことなどにより、平成25年度日本育種学会賞を受賞したことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

比留間 潔氏

昆虫の脱皮変態が、「幼若ホルモン」と「エクダイソン」の2種類のホルモンにより引き起こされるメカニズムを解明したばかりでなく、発生生物学上の重要な新知見を多く発見したことにより、日本応用動物昆虫学会賞を受賞したことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

小林 一也氏

プラナリアの同一種の中に、有性生殖しか行うことができない個体と無性生殖へも転換できる個体が存在することを実験によって示し、日本動物学会から2013年度論文賞及び藤井賞を受賞したことが、教育研究活動において顕著な功績であると認められたもの

【学内・団体】

緊急被ばく医療現職者研修実行委員会

平成22年度から、現職の看護職者及び診療放射線技師を対象に緊急被ばく医療に必要な知識とスキルに関する研修を実施し、本年3月には弘前大学出版会から「被ばく患者対応トレーニングマニュアル」を発刊したことが、教育研究等支援活動において顕著な功績であると認められたもの

「地質の日」 in 弘前

一般市民に「地質」に関わる聴講や実験体験の場を提供し、小中学生の科学への興味を強め、理科離れの低減に貢献する等、科学教育及び地域発展において多大な貢献をしたことが、社会活動において顕著な功績であると認められたもの

青森キャンパス事務部

青森キャンパスの開設において、新設である北日本新エネルギー研究所及び食料科学研究所における教育研究活動の円滑な運営において多大な貢献があったことが、教育研究等支援活動において顕著な功績であると認められたもの



名誉教授称号授与式

平成26年3月31日限りで定年退職され、教育上又は学術上特に功績のあった15名の本学元教授に「弘前大学名誉教授」の称号が授与されました。これにより、平成26年4月1日現在における本学名誉教授の称号を授与された方は295名となりました。

名誉教授称号授与式は、6月2日(月)午前11時30分から関係学部長、研究科長等列席の下、創立50周年記念会館岩木ホールにおいて執り行われ、佐藤学長から一人ひとりに辞令書が交付されました。また、授与式終了後、同会館において懇談会が開かれました。

名誉教授の称号を授与された方は次のとおりです。

清水 明 (人文学部)	倉 又 秀 一 (理工学研究科)
長谷川 成 一 (人文学部)	佐 藤 魂 夫 (理工学研究科)
村 松 恵 二 (人文学部)	鶴 見 實 (理工学研究科)
麓 信 義 (教育学部)	佐 原 雄 二 (農学生命科学部)
加 藤 陽 治 (教育学部)	石 黒 誠 一 (農学生命科学部)
安 藤 房 治 (教育学部)	菊 池 英 明 (農学生命科学部)
八木橋 操 六 (医学研究科)	神 田 健 策 (農学生命科学部)
松 本 光比古 (保健学研究科)	





強力なサポートで就職活動を支援します！

「弘前大学 学生就職支援センター」

大学生生活の集大成ともいえる就職。学生は学部3年ともなれば、勉強や研究に打ち込みながら、同時に「就活」にも挑まなければならない現実に直面します。そんな厳しい状況を力強くサポートしてくれるのが「学生就職支援センター」。昨年度の就職率、97.4%を支える活動をご紹介します。

「学生就職支援センター」は就活の第一歩！

「弘前大学 学生就職支援センター」は、学生の就職をより円滑に推進するため、全学的立場から就職支援を行うことを目的に平成16年に設置されました。センター長以下14人の職員が、総合教育棟1階エリアで月曜から金曜まで、さまざまな「就職相談」や例年2,000件を超える「求人票の閲覧」を中心に「最新の情報提供」など、学部1、2年の早期から対応できるサポート体制を整えています。閲覧資料の中には、昨年度の卒業生から寄せられた採用試験データやアドバイスなどを記した350件余の「就職活動報告書」などもあり、就活時期を控えた学生たちにとっては大いに参考になります。

中でもセンターが力を入れてきた「就職相談」は、民間企業に勤務した経験を持つ専任の就職相談員3人が、事前予約によって約1時間の個別相談に応じるというもの。「どんな仕事に向いているのか知りたい」というものから「模擬面接」や「エントリーシートの添削」など、多岐にわたる相談は昨年度だけで実に1,371件に上りました。個別相談の良さは学生個人の性格・目標・志望を把握し、きめ細やかなアドバイスが可能になること。「そのためにも入学初年度からの利用を呼びかけている」と石川センター長は話します。

センターの存在を知ってもらう取り組みもあります。学部1・2年で受講できる「21世紀教育」の特設テーマ科目として、「キャリア・デザイン論」「コミュニケーション力」などグループワークを中心としたキャリア教育「社会と私」を開講しているほか、受講

者を対象に東京・北海道・東北の企業見学会や卒業生との交流会を行っています。また、学生の編集による卒業生へのインタビュー誌「弘大『キャリア@通信』」は、今年3月で5冊目の発行となりました。

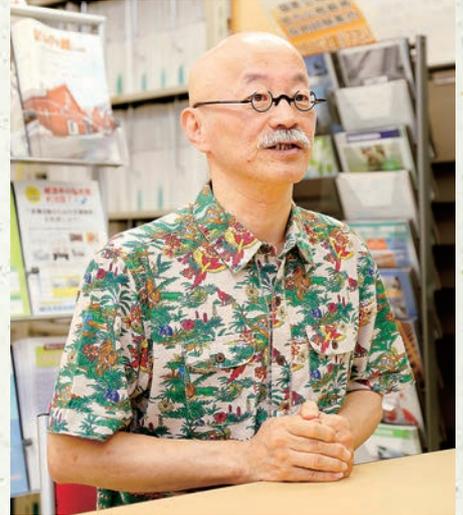
幅広い取り組みで就職活動を成功へと導く

大学生の就職活動が本格化するのは学部3年・修士1年から。民間企業だけを見ても就職情報サイトがオープンし、インターンシップの募集が始まり、業界ごとのガイダンスが開催されます。もちろん学生就職支援センターでも、オリエンテーション・業界研究会・就職関連イベントを経て、3月には県内外から200社以上の企業が集まる「弘前大学合同企業説明会」を開催。その後も卒業まで「学内個別企業説明会」などが続きます。また、一般企業とは別に公務

会社案内や求人票などが並ぶ書棚。内定を勝ち取った先輩達のレポートは貴重



オフィスにはスタッフが常駐し、就活のあらゆるサポート業務を行っている



弘前大学 学生就職支援センターセンター長
弘前大学 教育学部教授

石川 善朗(いしかわ よしろう)

1985年、東京芸術大学卒業。1987年、同大学大学院修了。1989年、青森県工業試験場 技師採用。同試験場の技術普及部長を経て退職。2006年、弘前大学教育学部 美術教育講座助教授、2007年、同大学教育学部及び大学院教育研究科 美術教育講座教授。同年から弘前大学地域共同研究センター兼任教授。2008年、同大学大学院地域社会研究科 後期博士課程地域産業研究講座兼任教授、2010年から現職を併任。青森県文化財保護審議委員会委員。弘前市「景観アドバイザー」委員。芸術学修士（漆芸）。



ホームページからも求人票が検索できる



学生が先輩の職場を訪ねるインタビュー誌。期待と不安は先輩も同じ

員志望の学生には、生協との共催で開催される公務員講座のガイダンスをはじめ、採用情報の提供や具体的な対策サポートが行われます。

こういったサポート活動が功を奏し、弘前大学における就職率は平成20年度から軒並み90%超えで推移し、特に昨年度は97.4%と統計を取り始めた1984年度以降で最も高い就職率を記録。学部別でも人文学部96.6%、教育学部97.0%、医学部・保健学科99.4%、理工学部97.6%、農学生命科学部96.5%と高い数字を出しています。これを受けて石川センター長は「景気が回復していることもありますが、センターの努力も大きい。あと数%のところ就職できていない。ここの所を今後ひろい上げていかなければいけない」として、「自分たちの適性を見極め仕事に対する視野を広げるためにも、学生には自分の可能性をどんどん広げていって欲しい。そのためにも、学生と企業、そして仕事のマッチングに一

層努めたい」と熱く語ります。

企業を開拓していく精神こそが成功への鍵

実は石川センター長が懸念することには、学生たちの視野が広がっていかないことがあります。「リーマンショック以来、安定を求めて公務員志向が強まっていますが、どこかで民間へシフトすることも必要です。また、企業選びに関しても、ビッグネームを掲げた大企業にこだわる学生が多い。しかし、実際には企業対企業で莫大な利益を上げている中小企業や、大企業の系列会社の中にも国際的に一目置かれている企業はたくさんあります。これは親御さんにも同じことが言えて、社名を聞いたことがないという理由だけで、内定を断ったという例もあるくらいです。現実的に学生たちは一握りのたった5%の企業しか知らない。95%の企業に対しても

アンテナを張り、開拓意識を持って欲しい。私たちの仕事は彼らの背中を押して選択肢を広げてやること。実際、毎年県内3市を順繰りに回る企業への説明会では、大いに手応えを感じています。

昨年12月から、大学支援事業を行う企業と共同で「就職活動のための支援施設」の運営が始まりました。場所は東京での利便性を考えた新宿駅近くで、弘前大学をはじめ地方の国公立大学複数校が利用します。学生証の提示でインターネットやコピー機が無料で利用できるほか、更衣室や荷物預かりサービスなど、学生同士の情報交換はもちろん選考試験前後の利用や会社説明会の拠点として、昨年12月から今年5月までに延べ781人の利用がありました。

石川センター長は最後に「まずはセンターに顔を出そう。そして自分という人間を売り込もう。弘大生の評価は決して悪くない。今なら失敗しても必ずリセットできるはず」と熱いエールを送ります。



文部科学省 革新的イノベーション創出プログラム (COI STREAM)

The Center Of Healthy Aging Innovation ~革新的「健やか力」創造拠点~

【正式拠点名】脳科学研究とビッグデータ解析の融合による画期的な疾患予兆発見の仕組み構築と予防法の開発

P L (Project Leader) : マルマンコンピュータサービス株式会社 常務取締役 工藤 寿彦

R L (Research Leader) : 国立大学法人弘前大学 大学院医学研究科長 中路 重之

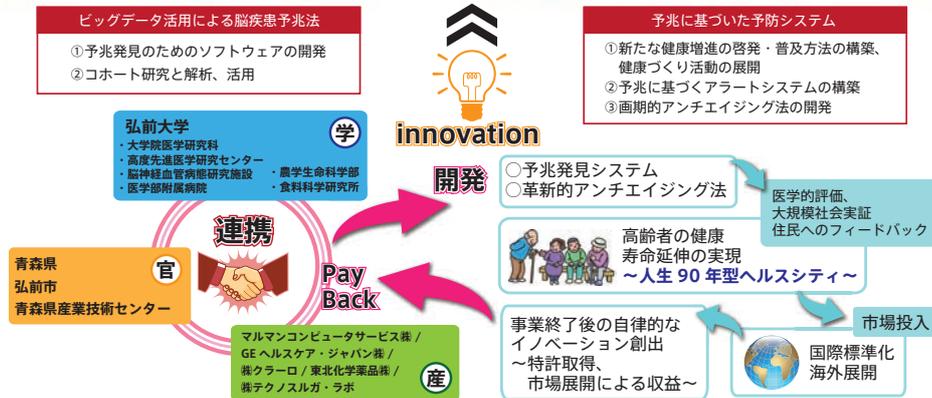
超高齢化社会の到来・10年後の社会を変えるために...

日本は世界一の長寿国であり、10年後は加齢を基盤とする脳卒中や認知症の急増が避けられません。医療費増大の原因となっている疾患後のニーズに応じた高度医療ではなく、今ある健康を失いたくないという「リスクコンサーン型医療サービス」へのビジネスモデルへの転換が叫ばれています。

本拠点では産学官が一体となり、弘前大学が有しているビッグデータを活用し、早期発見の仕組みを構築します。また、予兆に基づいた予防法の開発を目指します。10年後、誰もが健康で生き生きと暮らせる長寿健康社会を目指します。

将来の社会ニーズ：早期予兆発見による疾患予防法の開発

「疾患後のニーズに応じた高度医療」から「リスクコンサーン型予防医療への転換」へ



イノベーションに挑む・研究開発チーム構成

本拠点に参画する企業・自治体・大学等は、プロジェクトリーダーの統括のもと機能的な拠点運営を行うため、それぞれの特長を活かした役割分担を行うとともに、情報共有を密にし、日々議論を交わしながら一丸となって目標達成に向けて研究開発活動を推進していきます。

今後は更に拠点機能を強化するべく、企業や自治体等の様々な団体や他のCOI拠点との連携を拡充していきます。

予兆法発見チーム		予防法発見チーム	
国立大学法人弘前大学 行動解析・病態解析 10年間の健診による住民健康データの活用 ゲノムデータ等の新規データ取得 	(株)クラロ 病理画像分析機器開発 	国立大学法人弘前大学 大規模コホート研究 最先端のストレス応答解析 育種改良技術、機能的成分分析 食品機能的成分研究 	地方独立行政法人青森県産業技術センター 機能的成分分析
マルマンコンピュータサービス(株) システム構築 	(株)テクノスルガ・ラボ 健康度検査システムの開発 	マルマンコンピュータサービス(株) 地域連携システム構築 	青森県・弘前市 事業支援・全面的なバックアップ
GEヘルスケア・ジャパン(株) アルゴリズム・ソフトウェア開発 	青森県・弘前市 事業支援・全面的なバックアップ 	(株)テクノスルガ・ラボ 健康改善サポート関連製品の開発 	

「高齢者の寿命延伸」の実現

COI 研究推進機構 (弘前大学内) 〒036-8562 青森県弘前市在府町5 TEL: 0172-39-5535 FAX: 0172-39-5205

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」会員募集のお知らせ

弘前大学メールマガジン「ひろだいメルマガ」では、弘前大学への理解を深めてもらうことを目的として、最新の情報をメールで配信しています。

登録は簡単に出来ますので、配信を希望される方は、下記URLより是非ご登録ください。購読は無料です。(登録はパソコンのアドレスでお願いします。)

「弘前大学教員紹介シリーズ」

弘前大学に在籍する先生の、研究内容はもちろん、趣味など、普段の授業では聞く事が出来ない情報も紹介します。

「今、この部活動・サークルがおもしろい」

学生記者がイチオシの部活動やサークルの活動内容などを詳しく紹介します。

「講演会・セミナー等のお知らせ」

予定されている講演会やセミナー等のスケジュールを紹介します。

詳細は、下記URLをご確認ください。



ひろだいメルマガ <http://db.jm.hirosaki-u.ac.jp/magazine/>

ひろだい vol.23

2014年9月発行

弘前大学総務部広報・国際課

表紙：弘前大学附属図書館

「ひろだい」に関するご意見・感想をお聞かせください。

「ひろだい」はWebでもご覧いただけます。

下記URLからお進みください。



〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地

Tel.0172-39-3012 Fax.0172-39-3498

E-mail: jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp

<http://www.hirosaki-u.ac.jp>

